

科目名	文化人類学		コード	5310300				
授業形態	履修形態	単位数	年次	開講期				
講義	選択	2	2～3年	後期				
担当者名	安溪 遊地							
授業概要 私が沖縄・西表島やアフリカの熱帯雨林の村で経験してきたフィールドワーク(野外調査)をできるだけいきいきと実況中継的に伝える。自分の文化こそが標準だと自動的に考えてしまう色眼鏡を通して世界を見ることが、戦争の背景の一つにあることを学ぶ、異文化に直接触れて学ぶフィールドワークという手法とそれを開拓したイギリスの人類学者マリノフスキーなどの足跡を学び、フィールドワークの中で一人一人の調査者が超えなければならない、自文化と異文化の間によこたわる深い淵や、そこに立った時の人間としての葛藤を感じてもらうことが最大のテーマである。理解を具体的にするために、世界の人々の暮らしを描く映像資料も活用する。								
到達目標 2001年9月11日。世界は憎悪とテロと戦争の新世紀に入った。こんな今だからこそ、異文化を理解し、自分の文化との対比から「みんな違ってみんな変」という、異なるものへの「寛容」を実践できる力を身につける方法を学ぶ。			成績評価の方法と基準 出席と授業中の発言による「参加点」。自由なテーマの小レポート1回以上と期末大レポート1回。大レポートのタイトルは授業中に指示する。					
学習目標		評価項目と割合						
具体的学習目標	配点比率	出席及び授業態度	小テスト	自主学習態度	レポート	プレゼンテーション	学期末試験	その他
(1) どんな文化も「みんな違ってみんな変」と気づく	50	10	5	5	0	5	25	0
(2) 異文化を生きる人々の暮らしと自分との関係を知る	20	0	0	10	10	0	0	0
(3) 異文化間の対等で平和的な交流の経験をもつ	20	0	0	0	0	0	0	20
(4) 異文化間の寛容の大切さをわかりやすく表現できる	10	0	0	0	0	5	5	0
授業の項目と内容			自主学習課題					
(1) フィールドワークの魅力を知る								
大学に失望して「寝たきり学生」だった私を起こしたフィールドワークと野外科学の魅力。川喜田二郎・伊谷純一郎・宮本常一などの先学のフィールドワークに学んだこと。			川喜田二郎・伊谷純一郎・宮本常一・本多勝一などの、異文化のフィールドワークのいきいきとした記録を図書館等で借りて読んでみる。					
(2) どんな文化も「みんな違ってみんな変」 文化は相対的なものだ								
「お父さんが一人しかいないなんて！」初めて訪れた外国、コンゴ民主共和国の森の中の村で養子に生まれて学んだ、文化や社会の違い。スワヒリ語の世界。			「アフリカ」というキーワードで思い浮かぶことを、なんでも自由に10項目以上書き出してみるブレンストーミングをして、友人とそれを比べてみる。					
(3) 「バカセなら毎年何十人もくるぞ」 初めてのフィールド・西表島との出会い								
「ここが世界の中心なんだ」という、誇り高い西表島の島びとたちにしごかれた、楽園のつらい日々。沖縄方言入門編のビデオを見る。			西表島の人々の言葉「バカセなら毎年何十人もくるぞ」の聞き書きを読んで、なぜこうした発言が出てくるのか、その背景を考えて、授業評価のコメントに書く。					
(4) 調査される側に立って 調査地被害のお話								
「人が滅びるならば学問で滅びる」という南の島の女性の言葉。調査される側の様々な迷惑を語る声に耳を澄ませる。			「される側の声」を語る女性P子さんに向けて、ハガキ1枚程度の便りを書いてみる。コミュニケーションボードに200字程度で。					
(5) 私の研究1 農耕文化の生態人類学								
安溪遊地著『西表島の農耕文化』(2007年刊行)から、そのエッセンスを紹介。島の人と自然と農耕の歴史から日本の文化史の一面が見えてくる。			http://ankei.jpで西表島についての安溪の論文やエッセーのひとつを読んで、その感想を次の週のコミュニケーションボードに書く。600字以上で、自由レポート1回分					
(6) 私の研究2 島の暮らしの経済人類学								

地域を越える交易システムの研究。島は孤立した存在ではなく、50キロを隔てた黒島と西表島の住民が、灰と稲束を物々交換する習慣があった。その交易の秘密を探る。	前回と同じ。講義終了までに自由レポートを少なくとも1回は書いてみよう。
(7) 地域研究と地域での実践的活動の悩ましい関係	
古代的な稲作の研究をしているうちに島の人々と親しくなり、その悩みに耳を傾けるうちに、無農薬米「ヤマネコ印西表安心米」運動のボランティア営業部長になっていた。	聞き書きを発表するにあたって、最新の注意を払ったのに、某有名作家の盗作で深刻な人権侵害がおこった。http://ankei.jp/yuji/?n=27でそんな例を読んでみよう。
(8) 先住民族に学ぶ アイヌ民族の今	
「役目なしに天の国から降ろされたものはない」先住民族アイヌの人たちの声に耳をかたむけてみよう。そこには、誰もが忘れてはならない大切なメッセージがある。	アイヌ民族は、現在日本に何人くらいいるのだろうか。あなたが自分で思い浮かべた数と、統計の教えている数を比べてみよう。その差がなぜ生じたのか意見をまとめよう。
(9) 万物にカミが宿る アニミズムの復権	
「欲ではありますが」といってお願いをするという、屋久島のおばあちゃんの祈りの言葉を紹介する。アイヌ民族のとも共通する精神世界が屋久島にあることを確認する。	アニミズム的な習慣が自分の身の回りにないか、身近な高齢者にたずねてみよう。自分で実行している例があったら、コミュニケーションボードで紹介してください。
(10) 私の研究3 話者が筆をとる 調査地被害の超え方	
琉球弧聞き書きの旅から。一方的「聞き取り」調査から、話者が本当に伝えたいことに耳をすます姿勢に転ずると、これまでとは別の世界に出会うことができる。	安溪遊地・安溪貴子が西表島の廃村出身者と共同でまとめた郷土誌3冊のうち、1冊を借りて読んでみる。著者のふるさとへの思いについて、自由レポートを書いてみよう。
(11) う文化をならずものと見なす野蛮に気づく 文化人類学の役割	
あしもとから寛容と平和をつくるために。親しい友が世界中にいることこそが戦争への最大の歯止めになると新渡戸稲造(にとべいなぞう)は信じた。	http://ankei.jpで、「平和」をキーワードに検索して、面白そうな記事をいくつか読んでみる。
(12) 異文化を美しく語る 「ほめころし」という落とし穴	
世界を覆う不平等の現実に対して、文化相対論は、いかにもひ弱な建前にすぎないように思われる。フィールドでもらった言葉を手がかりに考えてみる。	「オリエンタリズム」という言葉の意味について、インターネットなどで調べてみる。
(13) 異なるものの共存を通して	
文化人類学的な寛容こそが、足下から平和をつくるための出発点である。しかし、寛容の精神の大切さを説くこと、「寛容の実践」には大きな隔りがある。	自分が書いてみたいと思う最終レポートについて、仮の主題を考え、どのような経験や資料が利用できそうか考えてみる。
(14) 文化人類学のレポートの組み立て方	
レポート課題を提示し、レポートの組み立て方について確認する。この講義のレポート評価の基準を過去のレポートの具体例を示しながら説明する。	最終レポートの「目標規定文」を100字程度で書き、文中での引用を予定している経験・本・雑誌・新聞・インターネットなどを具体的に列挙する。
(15) まとめ	
質疑応答と総合討論	学生による授業評価
テキスト、参考書、教材	履修条件及び備考(レポート評価基準・その他の具体的評価内容基準等)
プリント配布	授業はすべて地域の方々へも公開しています。国際文化学部の専門科目「文化人類学」と合併で実施します。
受講生へのメッセージ	最終レポートで異文化への差別的な意識が残っていると判断される場合は、書き直してもらいます。文化は相対的なものだ、と理解できていたら「可」以上。対等であるはずの諸文化が対等でないことに気づけば「良」以上。その不平等や差別と自分の暮らしとの関係を指摘し、解決の方法を提案できれば、「優」以上。さらに、出席状況・小レポートなどの点が良ければ「秀」となります。
「違うということはなんて素敵で美しいことなんだろう」と思える力、そしてその違いの中にかいまみる「同じ」に感動できる感性を育てましょう。	